

イラストレーター
中里まどか (30歳)
絵は、私に生きる力を与えてくれるもの

私の生まれる前から母親が油絵を描いて展覧会などにも出展しており、その影響で絵は幼いころから身近にある存在でした。10代のころは、母親から学びながら果物や花を題材に油絵を時々描く程度でしたが、20歳の時からは独学で、素描(鉛筆)画と水彩画を始めました。

“絵を描くことが自分の道”

27歳の時に精神的な病から入院した時、“私には、大勢の人の中で働いていくことは難しい”と気づきました。そして、退院後に1か月半かかって描いた絵がコンテストで入選したことが、私に大きな自信を与えてくれました。この時を境に、“私は絵を描いて生きていこう”という強い決意ができたのです。今までの作品は約100点ほどです。いろいろな方に見たり飾ったりしてもらいたいと思い、現在7作品をポストカードにして、東京・吉祥寺のユザワヤ店内にあるレンタルボックスで販売しています(来年1月まで/1枚100円)。今は“絵の幅を広げたい”と思い、童画に挑戦しているところです。私自身、元気がない時などに絵や音楽によって癒される^{いっ}ことが多々あります。だから自分も、人を癒せる絵を描いていきたいと思っています。

Madoka Nakazato

20歳から絵を描き始めて、フェーマススクールズ(イラストレーションコース)で4年間学び、29歳で卒業。自身の病の体験と、作品が入選したことが転機となり、絵を描くことを自らの道とした。現在、水彩画から童画へと少しずつ世界を広げている。



「**人**並みに幼稚園のころから絵を描いていました」という中里さん。お母さんは展覧会を開くほどの油絵のキャリアの持ち主だったため、中里さんは絵の具の臭いが漂う家庭環境に育った。今、自身の体験をバネに新たな一歩を踏み出す。

